

「スミス先生日記」（通称「スミス校務年誌」）前書き

今日の北星学園のもととなった北星女学校の形成と発展に関するあらゆる現存する記録の中で、最初期に関する最も完全で信頼の置ける単一の情報源は「スミス先生日記」である。これはハードカバー本の表紙に日本語で手書きされたタイトルであるが、一般的には「スミス校務年誌」あるいは単に「校務年誌」と呼ばれている。学校の創立者サラ・C・スミスの教育上の理想がまず述べられ、続いて1887年から1909年にかけて発展していく様子が書かれている。彼女は北星女学校で起きていたことを色鮮やかに描き出している。本書はまた米国長老教会（PCUSA）の外国伝道局日本宣教団が1800年代後半から1900年代初頭にかけて行っていたキリスト教教育のはたらきを典型的に示すものともなっている。

北星学園大学スミスミッションセンター運営委員会は校務年誌の原本をスキャンしここに転載、資料とした。北星学園の歴史的ルーツの理解をさらに深めるという目的のためである。これは、北星学園百年史（北星学園、1990）第二巻における校務年誌の英語資料、及び石原菊雄（1994）による校務年誌の日本語訳を補うものである。なお両者とも本資料に含まれている。原本とこれらいくつかの資料を合わせることによって、サラ・スミスが語る物語をより深く正確に理解することが可能になることを望むものである。さらなる情報に関しては、北星論集（社会福祉学部）第48巻、1～19ページの、校務年誌に関する論文を参照のこと。

ミッションセンター版の資料に関していくつかの留意点を述べる。第一に、日本人学生と教員の名前に関して、校務年誌の原本では筆記体のつながり具合が不明瞭であり、またスペルが時に不正確であるため、本資料の名簿はスミスの記録に厳密に基づいたものではなく、他の出典に依った場合もある。それには北星学園女子中高同窓会名簿を出典とする校務年誌の日本語訳、及び「百年史」等も含まれる。第二に、原本においては下線を引いてあったり、注釈や訳が余白に書き込んである単語が散見される。しかしながらこれらの書き込みはどれも元々原本にあり、どれが後に書き加えられたものなのかわからないため本資料からは除外されている。第三に、日本語訳と百年史版では原本のこまかい誤りを修正し、人の名前をフルネームからイニシャルに変える、不必要な単語は省略する、などの処置をとっていることもある。これに対してセンター版では間違い等も含めて原本の形態に可能な限り近づけるよう試みた。唯一のはっきりした例外は名簿における名前の配置である。原本ではしばしば二、三列に並べられているが、見やすいように一行一項目の形にしてある。

校務年誌の資料には北星学園を深く理解するのに必要な、ユニークな事実と数字の組み合わせが含まれている。スミスの書物は、学校を構成するグループと、彼女たちが学んだり教えたりしたその状況に関する、信頼しうる明瞭なデータを与えてくれる。また、北星の性格と精神のもととなった方針、プログラム、人物たちについて述べている。学園創立者のこれ

らの言葉は、北星学園大学が50周年を、また北星学園が125周年をそれぞれ祝う時を迎えた今、学園の歩んできた道に対する有益な視点を提供する助けとなる。